

道

小鳥の目になって飛行機から俯瞰する

ひとすじの道がおつている

おぐらい緑のなかを

ほの白く ほそく

どこまでもつづいている道は

——女のよう

道には

往還するものがあるはずなのに

人の子ひとり

トラック一台の影さえもない

街路樹もなくむきだしの道は

完全に空無——

道は

完全な無をのせたまま

カーブしながらしなやかに前へ前へとのびる

そう 白い道には終りが無い

道は

上をゆくものの時間を刻みながら

道は

上をゆくものの生の重みを受けとめながら

青い球体の上をほそほと

どこまでもどこまでもつづいて

ほのかに白い円環となる

道に

人間の姿が車が見れないことを

なぜともなく祈る

夕闇は

地表の森にもっとも深い

闇は

空からおりてくるのではなく

地上から立ちあがる——

道は

すでに森に没した

かなしいまでに明るい余光のなか

うすずみいろが ぼあつとにじんで

麗江古城が見え出す